

## 6 Low GH acromegaly の 1 例

渡邊 駿・鈴木 恵綾・柄澤 繁  
野村 俊春\*・菅井 努\*・米岡有一郎\*\*\*  
間中 英夫・後藤 敏和\*\*

山形県立中央病院糖尿病内分泌代謝科  
同 脳神経外科\*  
同 循環器内科\*\*  
新潟大学医歯学総合病院脳神経外科\*\*\*

症例は、71 歳、男性。当院循環器内科への定期通院の際に Acromegaly 様顔貌を指摘。内分泌検査の結果、GH 1.21ng/ml、ソマトメジン C 231ng/ml と、ソマトメジン C の高値あり。精査目的に当科紹介となった。同時期より血圧上昇も出現し、降圧薬内服を開始した。

精査の結果、内分泌学的基礎値では GH は正常範囲だがソマトメジン C は高値であった。75gOGTT では負荷後、GH は抑制されず、上昇した。頭部 MRI 検査では下垂体腫瘍が指摘された。以上の検査所見より low GH acromegaly と診断。当院脳神経外科にてハーディ手術を施行した。術後 30 日ではソマトメジン C の正常化に加え、降圧剤の中止、顔貌の変化など臨床症状の改善を認めた。一方 75gOGTT では依然負荷後、GH が上昇した。

この様な結果の理由として下垂体腺腫の取り残しの可能性、測定時期の問題を考えた。そのため術後 2 ヶ月で再度 75gOGTT を施行。負荷後の GH 上昇は起こるものの上昇時間が遅れてきており、GH 分泌に変化が生じている可能性を示唆する結果であった。

## 7 GH 産生下垂体腺腫は早期発見されるようになってきたか - 続報 -

大野 秀子・米岡有一郎・岡田 正康  
藤井 幸彦

新潟大学脳研究所脳神経外科

【対象】2006-2015 年までの 10 年間に初回手術を受けた GH 産生下垂体腺腫、連続 81 症例（前期 35 後期 46）。

【結果】後期症例で GH < 5.0ng/ml 未満での発見（11.4 % vs. 26.1 %）heel pad < 22.0mmi での発見（23.3 % vs. 39.0 %）例が増加。DM（38.2 % vs. 30.2 %）HT（37.1 % vs. 27.3 %）は減少。微小腺腫 5 例は全て後期症例。画像診断先行例（14.7 % vs. 30.4 %）、本疾患に無関係の主訴で各科を受診した症例が増加（26.5 % vs. 43.5 %）。IGF-1（834 vs. 594, p < 0.001）、Z-score（年齢 SD）（8.6 vs. 6.5, p < 0.001）は後期で有意に低下。全期間を通じて DM 群 24 例/境界型以下群 53 例の間で GH, IGF-1, Z-score に有意差が見られた。高血圧 25 例/非高血圧 53 例の間には有意差なし。

【考察】近年における本疾患の早期発見傾向が確認された。MRI で偶発腫として発見される例が増加した一方、無関係の主訴で来院した症例が各科医師に拾い上げられている実態も窺われた。IGF-1 および Z-score は後半症例で有意に低値であった。全期間を通じて耐糖能と GH, IGF-1, Z-score はよく相関し DM 症例の減少という観察結果と矛盾しなかった。

## 8 内視鏡下経鼻下垂体腺腫摘出後の下垂体前葉機能回復について

米岡有一郎・大野 秀子・岡田 正康  
藤井 幸彦

新潟大学脳研究所脳神経外科学

【目的】術前に下垂体機能低下が認められた非機能性下垂体腺腫（NFPA）症例で、内視鏡下経蝶形骨洞手術（eTSS）後に下垂体機能が回復するか否かを検討した。

【方法】2012/01/01-2015/09/30 の約 44 か月に当科で eTSS を受けた NFPA 症例を後方視的に検討した。当該期間の NFPA101 例中、開頭術を受けた症例や評価不能例を除き、eTSS を受けた NFPA 94 例を対象とした。

【結果】94 例のうち術前に下垂体機能が低下していたのは 17 例、男性 14 例、女性 3 例、平均年齢 53.2 歳（34-71 歳）であった。低下の内訳は、